

「——奥さんたち、実刑かね」

と大谷の母が言った。

「たぶんね。でも、軽いよ、きっと」

「そりゃそうね、世間が承知しないよ」

「週刊誌あたりはそんな同情の記事ばかりですもの」

と弓江は言った。

捜査一課の部屋で、大谷の母の弁当箱を囲んで昼食、という図である。

「いい奥さんは、夫のためなら人殺しでもやるんだね」

と大谷の母が言った。

「母さん、そりゃ言いすぎだよ」

「そう？ 弓江さんはどう思う？」

「私はお母様に賛成です」

二人が微笑を交わすのを、大谷は、まんざらでもない顔で眺めていた。

フィルムが殺した

1

「面白かったわねえ、あなた」

映画館を出た東まさ子は、そう言いながら、夫の腕に手をかけた。

「そうだな」

東は、ちよつと不機嫌そうな声で答える。

「あら、あなたは面白くなかったの？」

「いや、そうでもない……」

と、東は言つて、キュツと目をつぶると、指で目を押した。

「どうしたの？」

「うん……。久しぶりで映画なんか見たから、疲れたのかな」

「そう。じゃ帰る？——でも、夕ご飯のもの、何も買ってないけど」

まさ子は、どこか近くの、ちよつと洒落たレストランで夕食を取りたかった。

結婚して二年目の記念日である。毎日の家計のやりくりは楽でない。こんな日ぐらひは、少し優雅な気分でも過したかった。

「いいよ。せっかく出て来たんだ。どこかで食べよう」

「そう？ 少し休んだ方が気分も良くなるかもしれないわ」

「そうだな」

二人は、もうすっかり夜の帳とぼけの降りた、銀座の街を歩いていた。銀座も今は店の閉るのが早い、まだこの時間はかなりの人ごみであった。

「ネオンがやかましいな」

と、東が言った。

「目が疲れてるのよ。見ない方がいいわ。どこに入る？」

「どこでもいい。任せるよ」

「じゃ、その道を入った所に、スイス料理の店があるから」

角を曲ろうとして、東はちよつと向うから歩いて来た、若いサラリーマンとぶつかった。

「おっと失礼」

と、少しアルコールの入っているらしい、その青年が言った。

「おい、何だその態度は！ 謝れ！」

東が怒鳴った。——まさ子はびっくりした。夫がこんな大声を出すのを聞いたことがない。

「だから失礼と言ったでしょう」

と、青年の方も、ちよつとムツとしたように言い返す。

「何だと、こいつー」

いきなり東が拳を固めると、青年を殴りつけた。——まさ子は啞然として突っ立っていた。

東は至つて穏やかな性格で、人と争うことがない。喧嘩はせいぜい口喧嘩で、それもない。たいていは自分の方が折れるか、逃げ出してしまふのが常である。

その、大人しい夫が、いきなり人を殴りつけたのだから、まさ子は、止めに入ることも忘れて、呆然としてしまったのである。

いきなり殴られた青年は、その場にひっくり返ってしまったが、すぐに起き上がると、
「何するんだ！ この野郎！」

と東へ飛びかかった。二人がもつれ合つて転がる。

「やめて！」

やつと我に返つたまさ子は叫んだ。「やめて！ 誰か——誰か止めて！」

東は大体がそう力のある方ではない。最初の一発こそきいたものの、後は、相手の青年の方が遙かに優勢だった。

青年がかけ声と共にくり出した拳が、東の顎に命中すると、東は、まるで棒きれでも倒すように、その場に倒れて動かなくなった。

集まつて来た野次馬の中から、初老の紳士が進み出ると、

「もうやめなさい」

と、まだ身構えたまま息を切らしている青年の肩を叩いた。

「あなた！」

まさ子は夫に駆け寄ると、頭を抱き上げた。

「しつかりして！——あなた」

「ちよつと失礼」

と、初老の紳士はかがみ込むと、「私は医者です」

「あの——お願いします」

その紳士は、東のネクタイを外して、首の所をゆるめると、心臓に手を当てた。紳士の表情が固くなった。着ていたコートを脱ぎ捨てると、東の胸もとを大きく開いて、耳を押し当てた。

まさ子は、顔から血の気のひくのが分かった。ただごとでない様子である。しかし、ま

さか命にかかわるようなことが……。たかが、喧嘩で殴られたくらいではないか。医者はポケットからペンシルライトを取り出すと、東の臉まぶたを押し上げて、目に光を当てた。

東を殴った青年の方も、ちよつと不安になった様子で、二、三歩近寄ると、

「どうですか？」

と、恐る恐る声をかけた。

医者は立ち上がると、まさ子の方を向いて、静かに首を振った。

「お気の毒ですが——亡くなりました」

まさ子は、その言葉が、まるで風のように耳もとを通り抜けて行くのを感じた。なくなつたつて？ 何がなくなつたのかしら？

「そんな馬鹿な！」

と、青年が声を震わせた。

「本当です。もう手の施しようがない」

と、医者は静かに言つて、「警察へ届けなくてはなりませんな」

まさ子は、不意に理解した。夫が死んだのだ。死んでしまった……。

まさ子はその場に崩れるように座りこんだ。

「奥さん！ しっかりするんです！」

医者がまさ子の肩をつかんだ。

まさ子は夫の胸に顔を伏せると、声を上げて泣き出した。

「でも、そりゃ殺人といつたつて、過失じゃないの」

と、大谷努の母は言つて、「はい、じゃデザートのグレイプフルーツをお食べ」

と、小さなタッパウエアの蓋ふたを取つた。

「もう満腹だよ、ママ」

警視庁捜査一課の警部、大谷努の昼食時間である。犯罪者には鬼より怖い警部も、二人暮しの母親にかかつては、小学生並の扱い。

この手強い母親と、いわば張り合っている格好なのが、一緒にお弁当を食べている、大谷の部下の香月弓江である。女刑事としての腕は一流で、かつ可愛い女でもあり、大谷と相思相愛の仲。もちろん大谷の母もそれは先刻承知で、何かにつけて、弓江を牽制することを忘れない。

暖い昼下り、警視庁近くの公園で、三人がお弁当を広げているのは、はた目には、ちよつと風変りなピクニックに見えたかもしれない。

「だめよ、食べなきゃ。ちゃんと栄養のバランスを考えて、デザートも決めてるんですからね」

大谷はため息をついて、デザートのグレープフルーツにかみついた。

「そんな事件は捜査一課の扱いじゃないんだろ？」

と大谷の母は言った。

「ええ、そうなんです」

と、香月弓江が代って答える。「でも、被害者の奥さんから、何か、ぜひ話したいことがある、つて、捜査一課に電話して来たんです」

「へえ。奥さんがね。じゃ、計画的な殺人だともいうの？」

「それは分かりませんが……」

「解剖の結果を見たけどね」

と大谷は言った。「別に、疑問の点はなかった。脳内出血だよ。頭を強く打ってね」

「奥さんとしては諦め切れないんじゃないの？」

と、大谷の母は言った。「気持は分かるね。突然夫に死なれたら、その殴った相手が、ただの過失で、軽い罪で済んじまうのが悔しいだろうよ」

「まあ、話を聞けば、多少は向うも気が済むかもしれないよ」

「よく食べたわね、努ちゃん、今日はいい子ね」

これが三十代も半ばの男に言うセリフなのだから。

「コーヒーでも買って来ましょうか」

と、弓江が言った。「お母様もいかがですか」

「じゃ、お願いするわ」

と、大谷の母が財布を出す。

「いいえ、お母様、それぐらい私が——」

「あなたにおごってもらう理由はありませんよ」

と、大谷の母は頑固である。弓江も逆らわないことにして、小銭を受け取ると、公園の入口近くにある、ハンバーガーショップへと走った。

「コーヒー三つ」

と頼んで、ふと、わきに、コーヒー二つ、両手に持って立ち去ろうとしている女性に目をやった。

どこかで見た顔だ。——その女性は、コーヒーを手に、砂利道を歩いて行く。

確かに、どこかで見たことのある顔なのである。気になり始めると、性格的に、いい加減で済ますことのできないのが弓江である。

特に刑事という職業柄、顔を憶えるのは得意だ。——今の女、指名手配とか、そんな顔ではない。それなら忘れるはずがない。しかし、見たことがある。

「はい、コーヒー三つ」

「あ、どうも」

「お盆、そこへ返しといて下さい」

「はい」

弓江は、ちよつとためらつたが、思い切つて、あの女の後をついて行つた。

女は、サラリーマン風の若い男と並んで、ベンチに座つて話をしていた。——離れていて、話はもちろん聞き取れないが、見たところでは、恋人同士の楽しい会話ではないらしい。

男の方が、どちらかといえば若い感じである。そして、えらく深刻そうに沈み込んでゐる。女の方がそれを元気づけている、という図に見えた。

未練はあつたが、近付いて行けば話をやめてしまふだろう。コーヒーが冷めない内に、と、弓江は、大谷母子の所へ戻つて行つた……。

昼食から戻つて、書類の整理をしていた弓江は、ふと思ひ付いて、銀座署から取り寄せた、あの過失致死事件のファイルを開いてみた。

被害者、東文夫。妻、まさ子。加害者、小山友也。——現場写真。被害者の解剖所見。

そして新聞の切抜きも入つている。それを何気なく見た弓江は、あれ、と思つた。

加害者の小山友也の写真に見覚えがあつた。さつき、公園のベンチで、女とコーヒーを飲んでいた青年である。

「香月君」

と、大谷が声をかけて来た。

「はい」

「例の事件のファイルかい、それ？」

「そうです」

「その奥さんが、今、応接室に来てるんだ。君もそれを持つて一緒に来てくれないか」

「分かりました」

弓江は、大谷の後について、応接室へと向つた。

「——どうもお待たせしました」

と大谷は中へ入つて、「東まさ子さんですね」

弓江は、思わず声を上げそうになつた。さつき、公園でコーヒーを買つていた女ではないか！

すると、あどとき、被害者の妻と、加害者が、並んでコーヒーを飲んでゐたことになるわけだ……。

「何ですつて？——」

思わず、大谷は訊き返した。

「ですから、あの件は、小山さんの責任ではない、と信じているのです」

「ちょっと待って下さい」

大谷は東まさ子を制して、「しかし、小山があなたのご主人を殴って、死に至らしめたのは事実ですよ」

「はい、よく分かっております」

と、まさ子が固い表情で肯く。「妙な妻だとお思いでしょう。夫を殺したのですから、本当なら小山さんを憎いと思うべきでしょう。でも、公平に考えて、先に殴ったのは主人の方なのですもの、小山さんを責めるのは気の毒です」

「しかし、それが過失というもので——」

「私が今日伺ったのは、他の点で、どうしても納得できないことがあるからなんです」

「どういう点です？」

まさ子は一つ息をついて、言った。

「主人は、とても大人しい性格でした。人と争ったり、口喧嘩さえ、めったにしたことがありません。家でも、会社でもそうでした」

「それで？」

「あの晩は、変でした。映画館から出て来て、少しめまいでもするようで、気分は良くないようでしたけど、いつもとそう違いはありません。それが——あの角を曲って、小山さんとぶつかったとき、急に怒鳴って、殴りかかったんです」

「そりゃまあ、人間ですから、ついカッとする——」

「いいえ」

まさ子はきつぱりと言った。「あのとき、主人は、いつもの主人ではありませんでした。何か——よく分かりませんが、何か原因があったはずですよ」

「原因？」

「主人が、突然、あんなに乱暴な人間になったのには、きつと何か原因があると思うんです。ただ苛々していたとか、カッとしたとかいうのとは、全然違うのです」

大谷は困り切った顔でため息をついた。

「そうおっしゃられてもねえ……。現実にはそういうことが起こったんですよ。それは認めなくちゃ」

「はい。でも、その原因は、ただの気分とかそんなものじゃないと思うんです。何か具体的な原因があります。きつとあります」

まさ子は身を乗り出すようにして言った。

「それが主人を殺したんです。小山さんが殺したのでも、主人の自業自得でもありません。主人を殺したのは、もつと他の何かなんです！」

夜の銀座を歩くのは久しぶりだ。弓江は、人ごみの中を、泳ぐように歩いて行った。映画館の前に立つと、看板を見上げる。——恋愛映画だった。

これを見て、人と喧嘩したくなるということはあるまい。

腕時計を見ると、この回の終映まで二十分ほどであった。終るとほぼ八時半。この時間に、東夫婦は出て来たのである。

それまで時間を潰そうと、ちょうど真向いの喫茶店に入った。ガラス張りなので、映画館から人が出て来るのが見えるのも便利である。

「いらっしやいませ」

ウエイトレスがやって来た。

「コーヒーを」

「はい。——あ、弓江じゃない？」

「え？ なあんだ、弘子！」

高校時代のクラスメイトであった。

「今、パートの主婦なの」

と、弘子は言った。学生時代からよく太っていたが、今もコロコロした感じがそのままである。

「そう。もう結婚して二年？ 三年か。早いわねえ！」

「弓江、まだなの？」

「私はさっぱりよ。女刑事なんて、もてるのはＴＶの中だけ」

「今日は仕事なの？」

「一応ね」

「わっ、じゃ凶悪犯でも張ってるわけ？」

「それなら一人でいないわよ。裏付けの捜査なの」

と、弓江は苦笑した。何しろ、刑事といえ、年中犯人と追っかけっこしていると思っ
ているんだから……。

「はいコーヒー。——あの映画館を見張ってるの？」

「あの回の映画が終るのを待ってるの。——ねえ、一週間くらい前、この近くで、人が死んだの、知ってる？」

「うん。あの、殴り合いして死んじゃった、ってやつね」

「そうそう。あの映画を見て出て来たところだったのよ」

「へえ、そうだったの。あの晩はうちもひどい目にあったのよ。それで憶えてるわけ」

「ひどい目、つて？」

「そこ見て」

と、弘子が指さしたのは、色々な国のコーヒーカップが並べてある棚だった。

「あれが？」

「叩き壊されてね。作り直したのよ。ほら、あの棚だけ新しいでしょ」

「そう言えばそうね。どうしてまた？ 酔っ払い？」

「違うの、それが。そういえばあれも、向いの映画館から出て来た客だったわね」

「え？ 本当？」

「そうなの。見たとこ、別にどうってことのない人だね。中年の紳士なんだけど、入って来て、コーヒー頼んで、そこまでは良かったの」

「どうしてそれが——」

「アメリカンをね、ブレンドって間違えたのよ。入りたての娘だったからだけど、すぐに取りかえますと云ったのに、急に怒り出してね。びっくりしたわよ。この店は俺を馬鹿にしてる、許せん、とか喚いてね、椅子を持って振り回し始めたの」

「凄いわね！」

「お客さんはキヤーキヤー悲鳴を上げるし、こっちもただポカンとしてるだけ。そして、椅子をあのを棚へ叩きつけた、つていうわけなのよ」

「災難だったわね。——で、その人はどうしたの？」

「ちよんどお巡りさんが来てね、取りおさえてくれたの。損害は弁償してもらえたのよ、おかげさまでね」

弓江は、じつと映画館の方を見ていたが、

「それは、この回を終って出て来た客だった？」

「そうよ。私、九時までの勤務だからね、よく憶えてるわ」

すると、東たちと一緒に出て来たわけである。——弓江はコーヒーを飲み干すと、

「じゃ、弘子、またね」

と立ち上がった。

「あら、映画終るの、待ってたんじゃないの？」

「ちよんと他に仕事ができてね。——ね、それ以後はそんなことなかった？」

「そう年中あっちゃたまんないわよ。お客が来なくなっちゃう」

と弘子は苦笑した。

弓江は表へ出ると、地元の銀座署へと足を向けた。

大谷が、東まさ子を持って余して困っているので、弓江が自分から進んで、この件を調べてみると言い出したのである。調べたところで、何か出て来るとは、正直なところ考えてもいなかったのだが。

公園で見かけた、まさ子と小山の、親しげな様子のことは、大谷にも黙っていた。話せば、まさ子の訴えがますます本気で受け取られなくなるのは分かり切っていたからである。むろん、常識的に言つて、まさ子の話は、無茶である。どんな大人しい人間でも、怒れば何をするか分からない。そんな実例はいくらでもある。

しかし、弓江は、今耳にした、弘子の話が気になった。同じ回の映画を見終つて出て来た二人の客が、酔つてもいないのに、周囲が啞然とするほどの暴れ方をした。もちろん偶然かもしれないが……。

「ええ、あの晩は、喧嘩や何かがちよつと多かつたですね」

と、その若い警官は言つた。

「他にも何か？」

「例の、死んじまつた一件を除いては、口を切つたとか、コブが出来たぐらいですがね。喧嘩が三件。その喫茶店を含めて、器物破損が三件」

「六件も……」

「それが妙なんです。どれもほとんど同じ映画館から出て来た人で同じ時間に起こつてい

るんですよ」

「同じ時間？」

「いくらか幅はありますがね。八時半から九時までの間です」

「酔つていたにしては、ちよつと時間が早いわね」

「そうです。面白いことに、一人も酔つ払つてた者はいないんですよ」

「一人も？」

「アルコールの検査をしています、みんな素面しらふです」

弓江はじつと考え込んだ。——これは偶然ではない。何かあつたのではないか。何か、

が。——あの東まさ子が言つたように。

「ね、その暴れた人たちの名前と住所を教えてちょうだい」

と、弓江は言つた。

「いやあ、もう勘弁して下さい」

三浦というその紳士は、頭をかきながら言つた。確かに、大暴れなどしそうには見えな

い。

「お仕事中にすみません。別に喫茶店の一件をむし返しに来たわけじゃないんです」

「いや、やったことはやったことですから」

と、三浦は、居心地悪そうに、喫茶室の中を見回した。

「一つ伺いたいことがあります」

「何でしょう？」

「あのとき、急に怒り出されたとか。お酒は飲んでおられなかったんでしょう？」

「ええ」

「一体どうして急に？ 前にもそんなことがあったんですか？」

「いや、それが分からないのです」

三浦は首を振った。「今でも、どうしてあんなに腹を立てたのか、分からないのです。あんなことは初めてだ。——ただもう、急に無性に腹が立って、何もかも、ぶっ壊してしまいたくなっただんですよ」

「それであんなことを？」

「そうなんです。お巡りさんが来て取り押えられたときには、もう我に返っていました。

——そう、あの何分間かは、まるで自分が自分の意志とは勝手に動き回っているようにでした」

「で、即座に損害をお支払いになったわけですね」

「恥ずかしいことですからね、全く」

「その気分についてつまり、そういう怒りっぽい気分になったのは、いつぐらいからですか？」

映画館にいる間からですか？ それとも出てからですか？」

「さて……」

三浦は考え込んだ。「映画館を出る頃には、多少、妙な気分になっていましたね。はっきりした記憶はありませんが、何かこう、頭がモヤモヤしてたような気がします……」

弓江は肯いた。

「それは、例えば、映画の内容とか、そういうことと関係がありますか？」

「いや、それはないと思いますね。何しろ恋愛映画です。これが、ギャング映画とか何かならともかく」

と三浦は言つて、ほほえ微笑んだ。

「それじゃ、その映画を見に行こうっていうのかい？」

と、大谷が目を丸くした。

「そうです。勤務時間外ならよろしいでしょう」

「そりゃまあ……」

大谷はちよつと迷いながら、「しかしなあ——」

「何かご予約でも？」

「今夜はお袋が夕飯の支度をして待つてるから」

「そうですか」

弓江は、いささかカチンと来た。「では、私、一人で行ってきますから」

「ちょっと！——分かったよ。一緒に行くよ！」

「ご無理なさらなくても」

「そういじめるなよ。お袋には、急な仕事が入ったとでも言っとくさ」

——かくして、五時過ぎの回に間に合うように、弓江と大谷は、あの映画館へ入った。空席を見付けて落ち着くと、大谷が言った。

「しかし、みんなが同じ映画を見ていたのに、どうしてその七人が暴れ出したんだらう？」

「分かりません」

と弓江は首を振った。「でも、少なくとも偶然ではありませんわ。七人も人間が、映画館を出て三十分の内に、普段なら考えられないほどの暴れ方をしているんです。あの奥さんの言い方じゃないけど、〈何か〉があります」

「フム」

と大谷は考え込んで、「あの手かな？ ほら、フィルムの中に、一コマか二コマ、ほかのメッセージを入れておくと、意識下に作用して、影響を受ける、というのがあったじゃないか」

「ええ、それは私も考えました。でも、それなら、その日に限って、事件の起こったのがおかしくありませんか？」

「なるほど」

「調べてみましたけど、同じフィルムをずっと使っているんです。あの日だけ、影響を受けやすい人がいたとも考えられないでしょう」

「すると……」

「ともかく、映画を見てみようと思ったんです」

「よし、じゃ、じっくりと見物しようか」

と、大谷は、足を伸ばした。「一人の観客にならなきゃいけないんだからな」

「ええ、そうですわ」

「ついでにアベック同士ということにして……手でも握って見るかい？」

「映画を見られなくなりますもの」

と、弓江は笑いながら、握られた手を、振り離そうとはしなかった。そこへ、

「私も仲間に入れとくれ」

と頭の上から声がした。

大谷が飛び上がる。

「ママ！ どうしてここが——」

「テレパンツってやつよ」

「テレ……パシー？」

「ああ、それぞれ。親と子の間には、他人にや分らない絆があるものなのよ」
大谷の母は澄まして言った。弓江は一つ席をずれて、大谷との間に、大谷の母をかけた。
「で、どんな映画なの？」

と、大谷の母が訊いた。

映画は、恋愛物とはいえ、歴史ドラマと絡めた大作で、三時間以上の長さで、途中に十分間の休憩が入った。

「——ああ、疲れるわね。映画っていうのも」

と、大谷の母が欠伸あくびをする。

「ママ、疲れたら先に帰っても——」

「いいえ、大丈夫よ。だって、入場料がむだになるじゃないの」
と大谷の母は頑として動かない。

「お母様、何か飲物でも？」

「あら、悪いわね。コーラでいいわ」

「はい」

弓江は席を立って、ロビーに出た。平日の夜の回ということで、そう人の姿はない。売店の若い男の子が、退屈そうにしていた。

「コーラ、三つ」

紙コップに入ったコーラを三つ、両手で挟んで捧げ持つと、扉の方へ歩き出した。

が、両手がふさがっている。扉を開けてくれる物好きはいないかな、と、扉の前に立っていると、足音が近付いて来た。

「あの——」

振り向きざま、頭に激しい痛みを感じた。殴られた……。弓江の手から、三つの紙コップが落ちて、弓江は、その場に崩れ落ちた。

3

「——おい！」

声が聞こえる。大谷の声だ。

弓江は目を開いた。大谷の青ざめた顔があった。

「警部……。青い顔して、具合悪いんですか？」

と弓江は言った。

「これなら大丈夫よ」

大谷の母が、濡れタオルで弓江の顔を拭いてくれる。

「すみません……。油断してましたわ」

「全くこの映画館の治安はなってない！」
と大谷が憤然として言った。

「どうも申し訳も……」

と、そばで小さくなっているのは、支配人らしかった。

「業務上過失、職務怠慢、で実刑にしてやる！」

「そ、そんな——」

と、支配人は今にも失神しそうだった。

「警部、あんまりおどかしちゃ気の毒ですわ。あ、痛……」

弓江はやつとの思いで体を起こした。「後ろから殴られて……。犯人を見る暇もありませんでした」

「当然だよ。コブができてるな。一応病院で診てもらった方がいい」

「大丈夫ですよ」

「本当に危ないわね」

と、大谷の母はここぞとばかり、「もう警官をやめてお嫁に行けば？」
とたきつける。

「もう何ともありません」

却ってシャンとすると、立ち上がった。「でも服がコーラでべとべとだわ……」

「そ、そのクリーニング代は持たせていただきます」

と、支配人もみ手しながら言った。

「ケチケチしないで、洋服そのものの代金ぐらい持ちなさい」
と大谷に言われて、

「ハア……」

と、また小さくなっている。

「盗られたものは？」

「別に。お財布だけだわ。それも小銭入れだから、大して入っていませんし」

「それにしても災難だったねえ」

「刑事が殴られて財布盗られちゃ、お話になりませんね」

と、弓江は照れながら、頭のコブをさすって、顔をしかめた。

「さあ、もう出よう」

と、大谷が促すと、

「あ、そうだ、映画はもう終わったんですか？」

と弓江は訊いた。

「いや、まだやってるけど……」

「じゃ、見て行きましょう」

「でも——」

「これは仕事ですもの」

と、弓江が頑張る。

「それではどうぞ、最上の指定席で！」

と、支配人が言った。

「別に暴れたくはならないねえ」

と、大谷の母が言った。

「こんな所でママに暴れられちゃかなわないよ」
大谷は苦笑した。

映画館を出て、弓江は近くの店で服を買って着替えていた。その後、このちよつと洒落たレストランに三人で入っているのだ。

「映画そのものに、人に乱暴させるような要素はないみたいですね」

と弓江は考えながら、「でも何かあるんだわ。偶然のほずがありません」

「もしかすると君を殴った奴も——」

「いいえ、それは違うと思います。東さんも三浦さんも、みんな、八つ当りのに暴れてい

ます。誰かを、後ろから殴るのはまるで違います」

「すると君を殴ったのは、ただのかっぱらい——」

「暴力かっぱらい、っていうのかしら」

「これから捜査をどう進めるか」

大谷はちよつと考え込んだ。「何もなかったことにして、忘れちゃったっていいんだがね……」

「でも、東さんの奥さんは、そう簡単に諦めませんよ」

「あの小山って奴をどうしてかばうのかなあ？——もしかすると計画的に夫を殺したのか」

「でも、それなら、わざわざ警察へ来たりしますか？ あのままだって、小山は大した罪にはなりません。つつけば却って損をするばかりですわ」

「それはそうだな」

と大谷は肯いた。

「このお魚はおいしいね」

と大谷の母がのんびりと言った。そのとき、

「何だ、このスूपは——」

とてつもない大声がして、店中が静まり返った。——怒鳴ったのは、五十がらみの男で、

きちんとした背広姿の、重役タイプである。

「責任者と呼ばー」

大して大きな店ではないのに、まるで、アマゾン川の向う岸と話をしているような大声である。すぐに、支配人らしい、でっぷりと太った男がやって来た。

「何かございましたでしょうか」

と、丁寧に訊く。

「このスープは何だ！ ぬるくて、飲めたしろものじゃないぞ！」

「それは大変失礼いたしました。すぐに取り替えさせますので——」

「取り替えるだと？ そんなことで済むと思うのか！」

「恐れ入りますが、他のお客様がびつくりなさいます。もう少し低い声でお話し願えませんか？」

「何だと？ この店じゃ、客に説教するのか！」

と言うなり、その客は、スープ皿を引っくり返した。スープが床にぶちまけられる。

「警部！」

弓江が腰を浮かした。

「様子がおかしいな。あの男。——ちよっと！」

と、大谷が立って行く。「落ち着きなさい！」

「何だ、貴様は？」

「スープがぬるいぐらいのことで、そう騒ぐ必要はないでしょう」

「大きなお世話だ！ この——」

いきなり男が大谷へ殴りかかる。

「努ちゃん！」

びつくりした大谷の母が、立ち上がりざま、

「うちの努ちゃんに——」

と言うなり、食べかけのムニエルの皿を、その男目がけて投げつけた。

母親野球大会があれば、エース間違いなしというべき怪投で、皿とムニエルはもののみごとに男の頭に命中した。

殴りかかって、一発目のパンチが空振りし、二発目を構えていた男の頭に、チョコントムニエルののっかったのである。

店中の客から、一斉に拍手が起こった。穴があったら入りたいという顔で立っているのは、もちろん大谷だった……。

笑いをかみ殺して、弓江は目を床に向けたが、ふと、例の男のテーブルの下に、何やらパンフレットのような物が落ちてるのが目に入った。

弓江は近付いて拾い上げてみた。——それはついさつき見て来た映画、〈地平線の恋人〉

のパンフレットだった。

「——いや、本当にお恥ずかしい」

十分後には、その男——ある会社の部長だった——は、すっかりしよげ切って、レストランの奥の小部屋に座っていた。

「すると、自分でもどうしてあんなに暴れたのか、分からないんですね？」と、大谷が訊く。

「そうなんです。何かこう……映画館を出た頃から、ちよつとこう胸がムカつくような感じはあったんですが、食事をすればよくなるだろう、と……。ここはひいきにしていた店なんです。もうとても顔を出せない」

「お酒は？」

「食前酒にワインを少し。——私は強いので、その程度で酔いはしません」

「それでいて、自分を抑えられなくなった」

「そうです。さっぱり分かりませんよ」

と、男はため息をついた。

店の支配人が入って来ると、

「どうぞ、熱いおしほりです。顔がムニエルくさいでしょうから……」

「いや、すまんね。全く申し訳ない」

「いいえ。熱いスープがテーブルに出ておりますので、どうぞ」

大谷はこの店が大いに気に入った。

三人でレストランを出ると、タクシーを捜しながら、ゆつくり歩き出す。

「——やはり何かあるんだ」

と、大谷は言った。

「ええ。でも何でしょう？——カッとなつて、それでいて永続きはしない……」

「心理的なものか、それとも——」

「ともかくね」

と大谷の母が遮って、「あの男を逮捕すべきだよ。大事な努ちゃんを殴ろうとして……」。

二十年ぐらいの刑に——」

「ママ、無茶はやめてよ、お願いだから」

と大谷はため息と共に言った。

「お前はこれほど心配してる私の気持が——」

「分かった！分かった！」

大谷はあわてて言った。

「タクシーですよ、警部」

弓江は手を上げて、タクシーを停めた。大谷の母と大谷が乗り込む。

「君は？」

「方向が違いますから」

「でも——」

と大谷が言いかけるのを、

「それじゃ、気を付けてね」

と大谷の母が遮る。「運転手さん、やってちょうだい」

タクシーが走って行くのを見送って、弓江はクスツと笑った。そして、風の冷たさにちよつと首をすぼめると、地下鉄の駅へと歩いて行った。

翌朝、出勤の電車の中で、弓江は大欠伸あくびをしていた。

急いで出て来たので、朝刊を見て来る時間もなかった。隣に座った男性が広げている新聞に、ちよいと目を走らせる。

ふと、〈映画が原因？〉という見出しが目に付いた。

「ちよつと失礼」

呆気あつけに取られている男性から新聞を引いたくするようにして、記事を読んだ。〈恋愛映画が喧嘩を生む？——『地平線の恋人』終映後に乱闘、暴行が続発！〉

大変だ。——一体どこからこの話が……。

「ねえ、あんた、新聞返してよ」

と言われて、ハツと我に返り、

「あ、どうも失礼しました」

と、平気で返す。これぐらいのことで恥ずかしがっていて、刑事は勤まらないのである。捜査一課へ入って行くと、大谷も同じ新聞を手に、どこやらへか電話をかけている。

「——ああ、よろしく頼むよ。——うん、それじゃ」

と受話器を置く。「お早う」

「お早うございます。その記事——」

「うん。調べてみたよ。君が銀座署へ行ってあの日の記録を調べたろう。それをどこかの記者が見ていたんだ」

「でもあの映画のことまで……」

「そいつが分からない。——映画館から、営業妨害で訴えられなきゃいいんだがね」

と、首を振った。

「昨日はどうだったんでしよう？ あのレストラン以外にも何か——」

「聞かせてみたんだが、まだ返事が来ない。ともかく、あまりこちらとしては目立って動かない方がいいよ」

「分かりました」

大谷の机の電話が鳴る。——大谷は話を聞くと、すぐに切った。

「あの一件以外には、それらしい事件はなかったそうだ」

「そうですか」

席へ戻って、弓江は考えた。——映画が原因？　しかし、それならば、もつと至る所で事件が起こってもいいのではないか。

それに、気になるのは、昨日、殴られた一件である。偶然と片付けるのは易しいが、そうとも言えないような気がする。もし、自分が殴られたことと、事件が一つしか起こらなかったこととの間に、何か関係があるとしたら……。

弓江は何かが閃きそうな気がして、じつと考え込んでいたが、ついにその予感消えて行つた……。

大谷の心配は、杞憂に終つた。それまであまりヒットしているとは言えなかった《地平線の恋人》は、たちまちその夜から超満員の盛況になつてしまつたのである。

全く、物見高いのは、都会っ子の特徴らしい。見終ると喧嘩したくなる、という評判だけで見に来た中学生や小学生までいたという。

そして、実際、暗示にかかりやすい単純な人間が少なくないようで、映画館を出て、喧嘩する者が何人か出た。

しかし、そのどれもが、いわゆる謎めいた怒りの力とは関係のない、単なる喧嘩に過ぎ

なかつたのである。

そして一週間が空しく過ぎた。弓江も、あまりこの一件に関り合つてはもられず、他の事件のために駆け回つていたので。

しかし、ふと落ちて着いてみると、あの一件が、気にかかつて仕方ないのだった。

一度、映画館の支配人が捜査一課へやつて来て、大谷と弓江に、あの映画館の入場券を十枚ずつ置いて行つた。それほどに、儲かつて仕方ないらしいのである。

その日の夕刊で弓江は、あの《地平線の恋人》が、いくらよく入るからといって、超ロングランは無理なので、来週一杯で終るといふ記事を見た。

もう一度、当たってみよう、と弓江は思った。解決しない内に終つてしまうのは、どうにも気分がスッキリしない。

4

「あら、弓江」

映画館の向い側の喫茶店に入ると、弘子が手を振つた。

「どう、景気は？」

「おかげで忙しくつて。ほら、例の騒ぎでさ」

「〔地平線の恋人〕?」

「そう。夜の回まで満員だものね。こつちも大いに繁盛するわけよ」

「あ、コーヒーね。——暴れる人は?」

「いないわよ。この間、映画館の前で、出て来た二人が殴り合いをやったけどね」

「へえ?」

「でも、実はね、知ってたんだ」

「何を?」

「映画館の支配人に雇われた、アルバイト学生なの」

「わざと喧嘩させたわけ? 呆れた!」

「商売商売よ。儲かるためなら。あ、コーヒーか。ごめんね」

すぐにコーヒーを運んで来て、「——ね、物好きがいるのよ」と声をひそめる。

「何のこと?」

「毎日、これを見に来るの」

「毎日、同じ映画を?」

「そう、大したもんでしょ」

「どんな人?」

「カップルよ。今、奥の席に座ってるわ」

指さす方へ目を向けて、弓江は目を見張った。——東まさ子と、小山の二人ではないか。

弓江は立ち上がると、二人の方へ歩いて行った。

「今晚は」

顔を上げたまさ子がハツとしたように、

「あ——刑事さん」

「こちらは小山友也さんですね。ちょっとお話したいんですが——」

と、弓江は言った。

「——そうなんです」

と、まさ子は肯いた。「このところ毎日、通って来ています」

「何のためですか?」

「何とか謎を解きたいんです。主人を殺したのは、この人ではなく、主人をあんな風にしてしまった、あの映画です」

「奥さんは、あの事件で僕の一生を台なしにしては、と心配して下さいなんです」

と、小山は言った。「決して僕と奥さんの仲は、世間に恥ずかしいものじゃありません」

小山は声を震わせて強調した。

「そんなこと考えちゃいませんわ」

と、弓江は言つて、映画館を見た。「私も、あの謎が解きたいだけです」

「他にも何人もいらつしやるとか……」

「ええ。新聞や週刊誌の記事はオーバーですけど」

「後二十分か。——ちよつと、コーヒー、もう一杯」

と、まさ子が言つた。

「中は暖房で喉が乾くんです」

「それにしたつて……。休憩時間に何か飲めばいいわ」

「僕はコーヒーしかだめなんです。というより、コーラの類が嫌いで、中じゃ、そんなものばかり売つてるでしょ」

「そうね」

と、弓江は肯いた。

それから、ふと何か考え込んで、急に席を立つと、赤電話に走つた。

映画館の中では、途中の休憩時間が終つて、後半部分がはじまろうとしていた。「ただいまより、〈地平線の恋人〉 第二部を上映いたします。……」

とアナウンスが、ロビーの方にも流れている。

トイレに行つていた観客が、あわてて客席への扉から、中へ入つて行つた。

音楽が流れて、第二部が始まる。もうロビーは閑散としていた。

売店は店閉いにかかる。飲物を売つている、二十歳ぐらいの男が、ホッと息をついて、空のケースやコップを片付け始めた。

「ご苦労さん」

と、売店のおばさんが、若者に声をかけた。

「終つたら帰つていいわよ」

「はい」

若者は売上げの入つた缶を渡して、「じゃ、お先に失礼します」と、頭を下げ、売店を離れた。

〈事務所〉と書かれたドアを開けて、中に入る。狭苦しい部屋を通り抜けると、奥はロッカーが並んでいる。

その若者は、一つを開けると、中から、ジャンパーと、スポーツバッグを取り出した。

ロッカーのさらに奥を抜けると、裏口へ出る。若者は、そのドアを開けて、表に出た。映画館のわきを回つて、正面に出て来る。そこへ、

「ちよつと——」

と女の声がかかる。

弓江である。若者は振り向いて、

「何か？」

「そのスポーツバッグの中、見せてくれない？」

「ええ？」

「警察の者よ」

と、弓江は警察手帳を見せた。

若者が、とたんに踵を返して駆け出した。

「止め！」

と、弓江が叫ぶ。拳銃を抜くと、空へ向けて一発発射した。

「分かった！ 撃たないで！」

若者は足を止めると、両手を上げた。

「バッグを下に。——そう、そのまま壁の方に」

弓江は若者を促した。手早く身体検査をして、

「名前は？」

「哲二だよ」

と若者はふくれて、「俺が何したっていうんだよ」

「なぜ逃げたの？」

と、弓江はやり返した。

「おい、香月君！」

大谷が、急ぎ足でやって来た。「大丈夫か？」

「ええ。この男が、麻薬をコーラに入れて、休憩時間に売っていたんです」

「それでおかしくなったんだな」

「あの人たちは間違えて飲んだんです。本来なら、ちゃんとそれなりの代金を払って、引換えに受け取るのに、最初は慣れていなかったたので、違う相手に渡してしまっただんです」

と、弓江は言った。

「たぶんお金は他の所で払って、その代りに、払ったという証明になるものを受け取っていたんだと思います。それをこの人に渡すと、麻薬の入ったコーラが手に入るというわけですよ」

「最初は七人も間違えたが、その後は間違えなくなりました。——ただ、時たま、うっかりすることもある……」

「私に渡した三つのコップの中に、たぶん薬入りのが入っていたんです。渡してから気が付いて、追いかけて来て、私を殴ったんでしょう」

「ふざけた奴だ！」

「それほど強い薬じゃなかったんですね、初めての人が、あの程度で済むんだから」
 「それにしても、大手柄だぞ。これから、麻薬のルートがつかめるかもしれない」
 「そうなるといいですけど。パトカーを呼んで来ます。警部、後をお願いできませんか」
 「いいとも、任せろ」

弓江は映画館の向いの喫茶店に走ると、電話で連絡した。
 「へえ、面白そうな話ね」

たまたま選番で残っていた弘子が、連絡の電話を聞いて喜んでいる。
 「これで騒ぎもおさまるでしょ」

と、弓江は言った。
 「あら、でも殴り合ってる人がいるわよ」

「え？」
 と表に目を向けて、弓江は仰天した。「警部！」

大谷が、あの若者と派手に取っ組み合っているのだ。

弓江はあわてて外へ飛び出した。

「警部！」

「この野郎！ 貴様のような奴は許さん！」
 と若者をつかまえると、殴りつけた。

「警部！ いけません！」

と、弓江は、大谷に抱きつくようにして止めた。

「離せ！」

「だめです！ 容疑者に暴力を振うなんて、警部らしくありませんよ！」

「こんな奴は殴り殺してやる！ 離さないと、お前も一緒にぶん殴るぞ！」

大谷が、びっくりするような声を出した。

「警部……」

弓江は啞然とした。「コーラを飲んだんですね？」

「離せ、この——」

「いいえ、だめです！」

さながら忠臣蔵の松の廊下の再現である。

二人がもみ合っている内、若者はそと立ち上がると、いきなり走り出した。

「逃げたわ！ 待て！」

「殺すぞ！」

よほど殺すのが好きになるようだ。

二人は若者の後を追って走り出した。

若者の前に誰かが立ちはだかった。——と思うと、若者の体は宙に弧を描いて、ドシン

と落下した。

「——お母様です！」

大谷の母は、のびてしまった若者を見下ろして、

「どうしたの、この子は？」

と言った。

「ママ……。どうしてここに？」

「テレビン——油じゃなかった、テレビバシーだよ」

と、言つて、大谷の母は背いた。

母親の前に出ると、葉の効き目は消えうせてしまったらしく、大谷も、いつもの様子に戻っている。

「やれやれ、これで解決か」

「でも警部……」

「何だ？」

「東まさ子さんの言い分が正しかったわけですね」

「そういうことになるな」

「小山の刑も違つて来るでしょうか？」

「多少は考慮されるんじゃないかな」

弓江は、バトカーのサイレンの音が近付いて来るのを聞いた。

「努ちゃん、ほら、手を拭いて。そんな手で食べたら、ご病気になるですよ」

「ママ、やめてくれよ！」

と、大谷が真っ赤になっている。

何しろ捜査一課の部屋の中である。もちろん、大谷の母のことはみんな知っているが、それでも照れくさいものだ。

「警部、お客様です」

と、弓江がやつて来た。

「誰かな？」

「東さんの奥さんです」

二人が廊下へ出ると、東まさ子が立っていた。

「どうもありがとうございます」

と深々と一礼する。

「いや、とんでもない。——小山君はきつと軽い罪で済みますよ」

「それは何よりです。もう、たぶん会うこともないと思いますけど」

「あら、でも——」

「あの人はまだ若いんですもの。これからです。少しでもその役に立ったと思うだけで、充分です」

東まさ子はくり返し礼を言つて、帰つて行つた。

「香月君」

「はい」

「お客様を応接室へ」

「え？」

「さ、案内して行こう」

「でも——誰も——」

「いいから」

二人は応接室へ入ると、ソファに並んで座つた。

「——さて、お客さんは忙しいようだ。僕らで話をしていようか」
「そうですね」

と、弓江は、やっと分かつて、微笑みながら言つた。

二人の唇がそつと触れ合つた。

とたんにドアが開いて、大谷の母が入つて来る。二人はあわてて離れた。
「あら、お客様は？」

お茶の盆を手にして、「帰られたの？」

「う、うん。急ぐ用があつたらしいよ」

「それじゃ仕方ないね」

と大谷の母は向いのソファにどつかと腰を落ち着けて、「せっかくお茶を三つ持つて来たんだから、三人でいただきますましよう」

「ママ——」

「お母様、いただきます」

と、弓江はお茶を取り上げた。

大谷はため息と共に、残る一つの茶碗を取り上げた。

このお茶に麻葉が入つてなくて幸いだ、と大谷は考えていた……。